事業報告　福岡県教育庁筑豊教育事務所主管研修　令和6年9月5日(木)開催

読書好きを育む環境づくり応援研修会

本研修会は、子どもを読書へいざなう取組についての知識・理解を深め、読書が好きな子どもが育まれる環境づくりに活かすことができるようにするとともに管内関係者のネットワークの構築を図るために企画しました。管内の公立図書館、読書ボランティア、幼稚園・保育園・学校関係者等36名の参加者が一緒に学びを深めました。

講師

「読み聞かせから一人読みへ」

絵本専門士　JPIC読書アドバイザー　日本子どもの本研究会会員　二田水　ゆかり　氏

研修Ⅰ＜講話＞

講話では、読み聞かせから一人読みに導くために、読書に関する法律や幅広い知見からお話頂きました。

子どもは、ひらがな清音４６文字中２３文字程度を獲得した頃から文を読み始めるといわれています。しかし、文字が読めることと本が読めることは同じではありません。自分で本を読むには、「文字を読んで意味を理解する」、「文字の意味をつなげて物語の流れを理解する」といった２つの作業を同時にする必要があるからです。

そこで、読み聞かせから一人読みへの移行期の読書行動を工夫することが必要となります。その工夫を助けるものとして、「幼年文学」の存在があります。幼年文学は、絵を頼りに内容をとらえる絵本と異なり、目を閉じて言葉を聞いただけで内容が分かる、文字だけで成り立つものを指します。この幼年文学を用いて読み聞かせをすることから移行期をスタートさせます。読み聞かせながら大人も一緒に創造力を膨らませて本の世界を楽しむ経験を繰り返すことで、子どもに「自分も読んでみたい」という気持ちがわくようになります。その時期が来たら、挿絵と文字のバランスが良く一人読みへと引っ張ってくれるレベルの幼年文学を子どもの手の届くところに置くようにします。また、大人が読書を熱中し楽しんでいる姿を見せることでも一人読みへの意欲がわき、読書習慣の形成につながります。

研修２ ＜グループワーク＞

講話に引き続き行ったグループワークでは、受講者一人ひとりが読み聞かせを行う活動を通して、研修Ⅰで学んだ幼年文学の特徴を確認し合うことができました。そして、大人が絵本や幼年文学の良さを理解し、子ども達の発達段階に合わせた選書の大切さについて対話しながら共有し、自然と理解を深める時間になりました。また、グループワークは終始笑顔で、和やかな雰囲気で相互の交流を深めました。全体の交流や研修会後の感想では「交流ができて楽しかった。」「グループワークを通してつながりができ、交流会後も連絡を取り合う計画をしました。」などがあり、このグループワークを通して、管内の読書に関わる関係者のネットワークの構築を図ることができました。

研修を終えて

研修後の「読書好きを育む環境づくりのために向けた今後の活動に活かしたいことのアンケート」には、「絵本だけでなく、幼年文学も選書していこうと思う。」「幼年文学について、図書館のおすすめ本コーナーに設置したい。」「子どもの一人ひとりのニーズにあった本を手渡していけるように努力する。」等の感想が多くありました。

本研修会を通して、子どもを読書へいざなう取組についての知識・理解を深めるとともに、読書好きな子どもが育まれる環境づくりに向けたつながりつくりと今後の実践への意欲を高めることができたと考えます。